

題名 豊予海峡の形成における津波の考察

序

ノアの方舟とか大洪水の伝説が世界各地に有る。もちろん空想と思われていたが、それが現実に有ったと考えるしかない地形を豊予海峡の海底に発見した。

特異な豊予海峡の海底地形

豊予海峡は四国と九州の間にある狭い海峡である。そこは海流が早く良い漁場として知られている。この海底は海峡を挟んで「海釜（かいふ）」と呼ばれる深い窪みになっている。その様子を（図1）に示す。

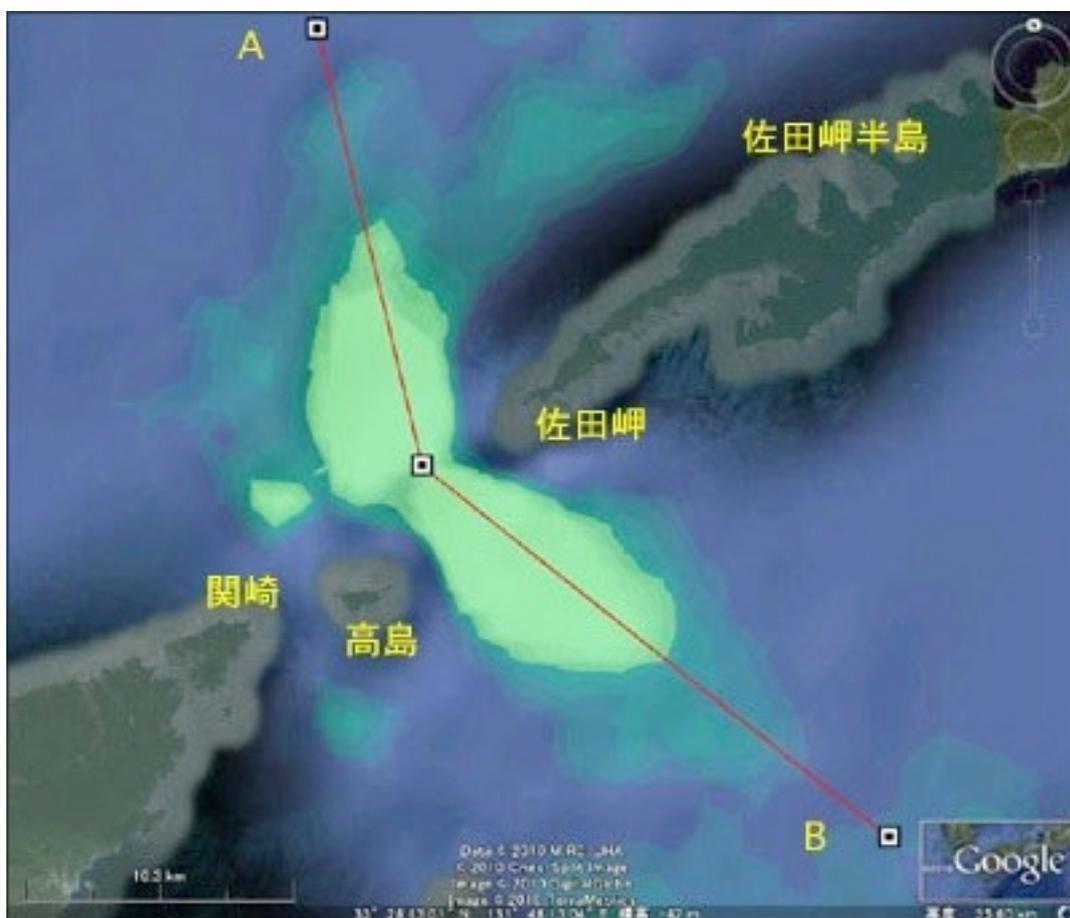


図1（色の境界＝水深120m）

この（図1）は”Google Earth”の機能を使い水深120mで色に境界を付け、更に±50mに10mごとに濃淡を付けたものである。海釜は瀬戸内海側と太平洋側の両側に有り、しかも高島と関崎の間の両側にも小さい海釜が存在している。地点A-B間の水深を（図2）に示す。

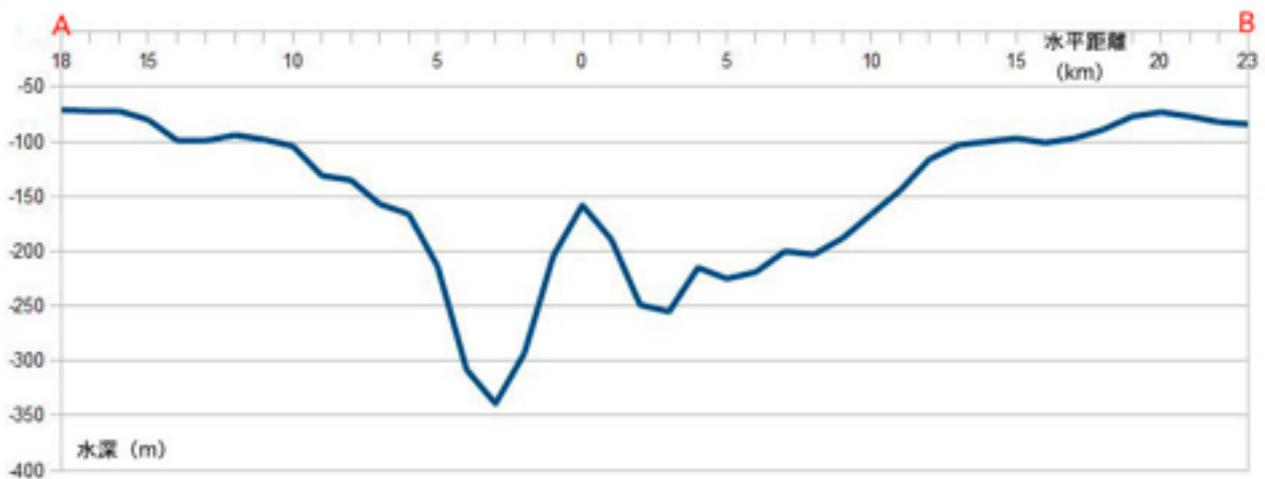


図 2

図 2 から分かる事は、瀬戸内側の海釜が極端に深く 350m 近くも有る。ただ実際にはもっと深いところも有るようだ。

この特異な海底は、どのようにして形成されたのだろうか。最初からこのような地形であった可能性は、佐多岬半島が日本を縦断する断層により形成された地形である事から否定されるだろう。大分から静岡まで日本を横断するこの断層に類似した地形は無く、海釜は豊予海峡の特殊事情により形成されたと考えられる。

最も考えられるのが水による浸食による形成である。豊予海峡は海流が速い海峡として有名である。しかし海流が海釜を作る事は不可能だと考えられる。海流は深くなるほど遅くなるからである。瀬戸内海には鳴門海峡や関門海峡など、同様に速い海流の海峡が有るが海釜は形成されていない。

巨大津波で説明可能な海底地形

そこで豊予海峡の海釜は、海面上昇により急激な海水の流れ込みが陸地だった瀬戸内海側に発生して形成されたと考えた。しかし海釜は太平洋側にもある。結局、過去に巨大な津波が有ったと想定すると、最も的確に豊予海峡の海底地形を説明できる事に気付いた。その過程を図を使い説明する。

巨大津波が有った時代は、氷河期末期などの瀬戸内海側が完全に陸地だった時代を想定している。当然、四国と九州も地続きであり、豊予海峡も峰が続いていたと考えられ、豊予海峡は（図 3-1）の様になっていたと考えられる。（一連の図 3）は（図 1 の A-B 断面）を簡略化して示した図である。

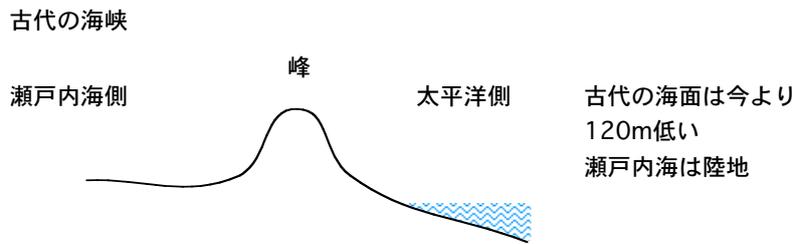


図3-1

この地形に巨大な津波が太平洋側から押し寄せ、峰まで達したと想定する。その場合(図3-2)の様な状態になると考えられる。

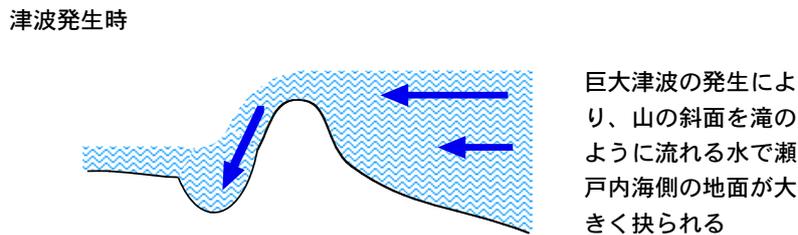


図3-2

青い矢印は海水の流れる方向である。津波によって上昇した海面が峰を超えた場合、大量の海水が斜面に沿って滝のように流れ、瀬戸内海側の地面に滝壺のような大きな窪みが形成される。この時の継続時間も水の量もはっきりとは分からないが、峰を超えるぐらいの巨大津波であるので莫大な海水になるだろう。

津波はやがて引き始める。そして(図3-3)の様な状況になる。

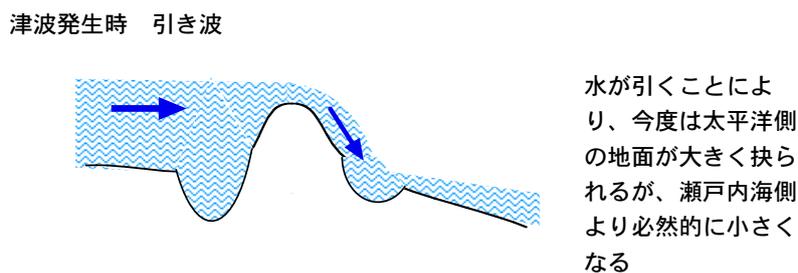
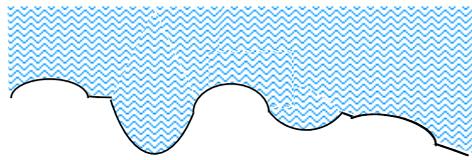


図3-3

津波の水が引けば、今度は瀬戸内海側に溜まった水が太平洋側に流れる。すると太平洋側の地面も深く削れる事になる。しかしその深さは水の量が少ないため、瀬戸内海側より小さくなる。

津波は何度も繰り返され、その結果(図3-4)の様な地形が形成される事になる。

現在



海面が120m上昇し、津波で峰が削られた場所が水没し深い海釜が残る。

図3-4

海水の流れが集中した峰は繰り返される津波で削られ更に低く狭くなり、両側に深い窪地が出来る。更にその窪地の外側には、削られた土砂が溜まり盛り上がる。そして海面上昇する事により、現在の豊予海峡と同じ地形になるのである。

(図1のA-B断面)の海釜は細長く、形や方向などから海水の流れに一致していると考えられる。また(図1のB地点)には、削られた土砂が流され堆積したと考えられる海底の盛り上がりを確認できる。

結論

豊予海峡の海底地形は、氷河期末期など海面が大きく下降した状態で、巨大津波が押し寄せて形成したと考えられる。巨大津波が発生した時期は、世界各地に伝説が残っている事から最も時代的に近いウルム氷期末期の可能性が高い。

現在古い時代の津波の研究が注目されているが、豊予海峡を形成したと思われる津波は巨大であり地球環境や人類にとって影響も甚大だったはずである。津波研究の時代をもっと過去まで遡る必要があるだろう。

2011年112月10日

SHOJI Yoshinori

exa@pipi.jp

<http://www.pipi.jp/~exa/>